

「彗星を写真に撮る」

天体写真の被写体候補の中でも、彗星は非常に魅力的な対象です。出現時しか撮影できない、それも太陽に近づいて尾が伸びた時だけです。その尾も毎日刻々と形を変え、しかも天球上のいろいろな星座に移動します。天体写真家にとっては、どうしても見逃せない被写体なわけです。

彗星の尾は太陽に近づかないと尾が伸びません。太陽に近いということは、尾が伸びて被写体としては魅力が増す一方、撮影は少しずつ困難になります。日没直後か日の出直前にしか見えないからです。実は彗星は、昼間でも太陽のそばに寄り添っているのですが、光球(太陽の実体)があまりにも明るいので、普通は見えないのです。1966 年の「池谷・関彗星」は満月なみの明るさで、昼間でも太陽のそばに見えたそうですが、これは例外中の例外です。つまり、天球上の彗星の見え方は、水星や金星といった内惑星とよく似ています。水星や金星も真夜中には決して見えません。彗星の見え方も、「宵の彗星」「明けの彗星」というわけです。



「百武彗星」 1996 年 長野県南牧村(野辺山高原) 撮影; C. Tanaka

1996 年に出現した百武彗星は、尾の長さが天球の 3 分の 1 にも達する、大彗星に成長しました。「彗星の大化け」といいます)しかし、撮影可能なのは、日没後 1 時間程度。上の写真を撮った時も、撮影 2 分後には稜線に沈んでいました。

今、おうし座付近に見えるラブジョイ彗星は、地球軌道よりも外側に位置するので、こんな心配はありません。今は一晩中見えています。これはいい写真を撮るしかありません!